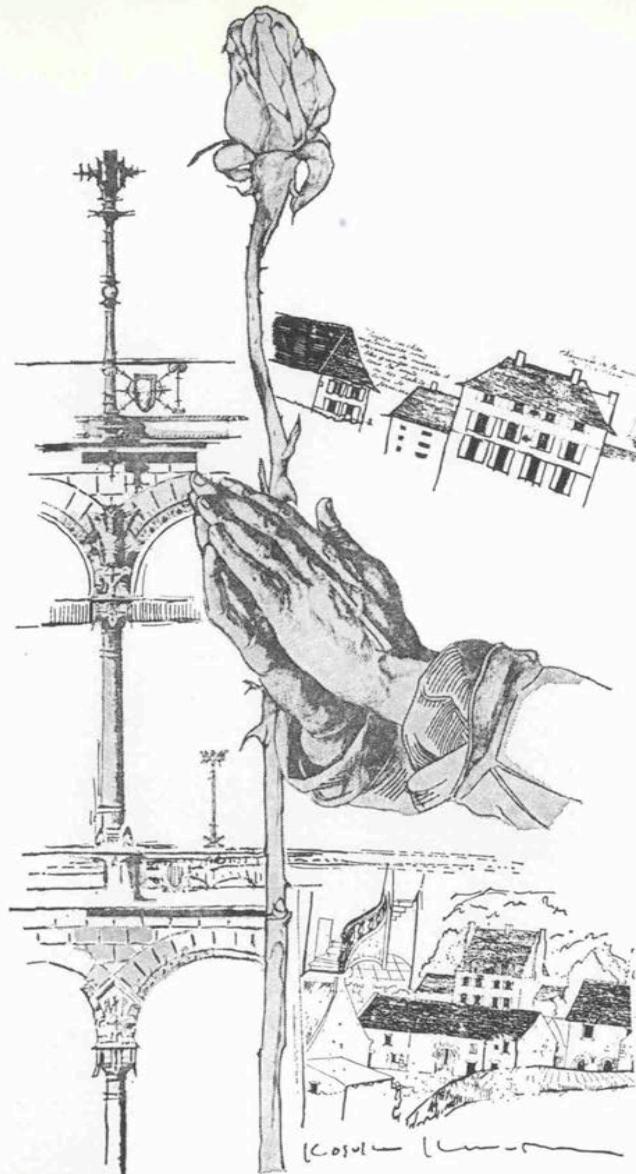




# 溶ける闇

高木敏克  
絵／木村光佑



ぼくは自分の世界が少しづつ崩壊してゆくのを知っている。まず最初にこの都会の名前は、次にはその様々なイメージが、きわめて具体的な現象により破壊されてゆくのに身をまかせている。たとえば、スペイン・バルセロナ・ランプラスという言葉を舌の奥で発音してみると、色々な像が浮かんでくる。それは眼球の裏に映像となる立ち現われるのだが、ぼくの一歩一歩はその美しい映像を踏み破ることしかない。あつ、しまった。今、何かを踏んでしまった。バナナの皮ならいいのだが、振り向くと犬の糞だ。そのヌリとした靴底の感覚が右足を追いかけてもう二十メートルもついてきている。それはいやに黄色く見えたが、ぼくの善意な認識がそこにバナナを想像したためだ。それは欺瞞だ。おそらく、ぼくのバルセロナに対するイメージも、そのような自己欺瞞的な想像力に培われたものだ。ここでは街の名が、イメージが、ぼくからどんどん剥げ落ちてゆき、ぼくは少しづつ想像力を喪失して、單なる一個の肉体になつてゆくのだ。それはカタルシスのように、ぼくにある種の快感を与える。その快感のために、幻想は大きければ大きい程よい。それは幻想の悲劇であり、物質的、あるいは見知らぬ事物の圧倒的な勝利だ。だが、いまだに悲傷な幻想の虜であるこのぼくは、空腹に対してもあるイメージを与えようとしている。そんなもので腹がふくれるはずはないのだが、ぼくが求めているのは、どこかのグラビア雑誌で見たスペイン料理の写真でしかないのだ。

いくつかのRESTAURANTの前を通り過ぎたの様子は、まるで溶鉱炉の中の炎ながら、赤々と浮かび上がっている。赤顔で語り合う男女の視線がギラギラと相手の眼球に突き刺さり、その視線を切つて給仕の手が伸びる。その横の席では、全身の毛穴を開いてアル

コールを發散しながら討論する男が額の汗をハンカチーフで拭い終ると、その大きな手がテーブルをたたく。それらの間をカストロ髭の男が、背中の線、脚の線にぴったり張り付く黒いスーツで、つづぱって歩いている。彼はテーブルの上に目を配り、時々するりと振り返ると、客たちの話し声に耳の穴を向け、彼らの満足に安心する顔をそらし、あらぬ方向に視線を遊ばせるのだが、正面から覗ると静かな顔だ。その顔がしだいに大きくなり、ドアの覗き窓と同じ位になると、ぼくは男の真青な瞳の色を見た。ドアが開くと、サングラスを払い落とされたのかと思うほどの照明に襲われて、ぼくは人声と体臭とアルコールの保溫箱の中に、揺れながら、床の異和感を踏みしめて入つてゆく。パイプの煙が赤茶けた古木に吸いついてゆく。肉料理の湯気は、柱、梁に張り付いて、艶やかな照りを与えていたが、それら見知らぬ物とぼくとの距離を埋めているのは、アルコール臭い人々の会話である。人声は誰によつて発せられるのでもなく、部屋全体から沸き上がり、適度の煙と湿度に味付けされて、燻製のようににわかれていた。垂れ下がるソーセージ、ニンニクの束、それら壁の上のひからびた静物の前を、そそくさと給仕たちが駆け抜ける。その奥では、湯気がもうもうと立ち上り、コックたちの赤ら顔を蒸し上げる。調理場は光の中にゆらめいて、銀の皿、流れる水、刃物たちから反射する逆光が、コックの顔を切りきざむ。それがこの店の中心で、そこから赤い血の料理が、頸動脈をふくらませた給仕たちによって運ばれる。それを見て、ぼくの心臓がときどきするのはきつとレタラチュールといふいう酒のせいだ。悪いのは心臓ではなく、酒だ。レタラチュールのために異和感はだんだん激しいものになる。そう納得するためにもう一杯飲みほすと、この異物に満ちたレストランの中でも少しは安心することができる。だが異和感は解消した訳ではなく、なお一層激しいものになってくるようだ。そのいたまれなさをなだめるために、ぼくはさらに飲む。毒をもつて毒を制する」とく、

何杯も飲む。激しい異和感を生む美酒は、それを飲まなければ苦しむこともないのだが、飲みはじめるやいなや、次々に飲み重ねなければ安心できず。安心したとて、元にもどる訳ではなく、つかのまの安心がさらに強烈な異和感を育て上げてゆくのだ。おそらく、この苦酒のために世界が異物と化するのではなく、この酒はぼく自身を異物へと、異物のはての怪物へと変身させつたのだ。ぼくの心臓の鼓動はしだいに大きくなってきて、やがて、自分の肉体だと納得しかねる程の激しさで頸脈動脈を打ち鳴らし、ついには鼓膜を打ち破らんばかりの大音響になってきた。もはや世界全体が胎児をゆすぶる母体となり、激しい鼓動で真赤な溶鉄の血液を送り込んでくる。ぼくを自意識の中に閉じ込める異和感は燃え上がり、世界全体が爆発寸前の状態にのぼりつめ、ぼくは生まれつゝ殺される胎児のように堕ちながら叫びを上げる。その剣刀状の叫びは、世界を水平線まで引き裂くことができる程だ。やがて幕はあくだろう。

どれ程飲んだであろうか。ぼくがこのレストランに入つた時にはすでにランチタイムが終りかけていて、ぼくはデイナータイムのはじまるまでの数時間で飲み続けたことになる。レストランはナイトショーの舞台をしつらえ、やがて幕はあく。客たちの激しい歓声に暗幕は引き裂かれ、暗幕の中から生まれたばかりの司会者が、スポットライトに照らされる。

△メダム・メツシユ・セニヨーラ・セニヨール、ここにお集まりの各国の皆様方、今宵はわれわれのすばらしいディナーショーをお引き立ていただきましてありがとうございます。お目の高い皆様方のお耳にも達するこれらの方のお目を満足させるのはず。なぜなら、これらよりすぐりのショードは、よりすぐりの皆様方のためにこそ創られておりのからです。△と數か国語で次々に繰り返す。

△お待たせいたしました。レディザンジエントルマン まず最初の登場は、カラコル姉妹の影絵ショード。△

二枚目の暗幕がさつと開くと、真白なスクリーンが現われる。純白の画面の端から、くねくねと空をまさぐる二本の触角が現われ、それに続いてなまめかしくのたうつ蝸牛の胴体が、ゆっくりとじらすように這つて出る。その尻の上には、もう一人の女が体を丸めてうずくまつていて、遠望するとそれは完璧な巻貝に見える。その下で二本の腕を触角のようすに操る女体は、生まれながらの軟体動物の仕草で、巨大な尻をうねらせている。やがて、背中の巨大な巻貝が、揺れながら、スクリーンの中央に移動する。照明が強められ、影が少しずつ白み始める。と豊満な女体が横たわっているのが見えてくる。その女の上には、もう一人の女が体を丸めてうずくまつていて、遠望するとそれは完璧な巻貝に見える。その下で二本の腕を触角のようすに操る女体は、生まれながらの軟体動物の仕草で、巨大な尻をうねらせている。白い画面は、実は何枚も重ねられたシルクスクリーンのようであり、次々に剥げ落ちて、しだいにはつきりと二つの女体を浮かび上がらせる。観客は唾を飲み声も出ず、やがて立ち現われる鮮明な生身の肉体を期待する。二人の女性像はしだいに独立した舞踏を演じながら、別々の個性的な容姿を際立たせてくる。均整のとれた姿態、きわめてスペイン的に整った容貌が見えてくると、どうだろう、二人の顔が急に大きくなり、スクリーンいっぱいに拡がって、につこり笑う。観客は映写機に騙されていったのである。虚像を見詰めていたのである。だが、裏切られた訳ではない。スクリーンが床まで直直ぐに切り裂かれ、それを破りながら映画の二人の出演者が飛び出してくる。すると、先程の映像はどこまでが影絵であり、どこからが透視された実像であり、どれが虚像のか解らなくなる。観客はあっけにとられ、その前では全裸の女体が、カクテル光線に舞い狂う。

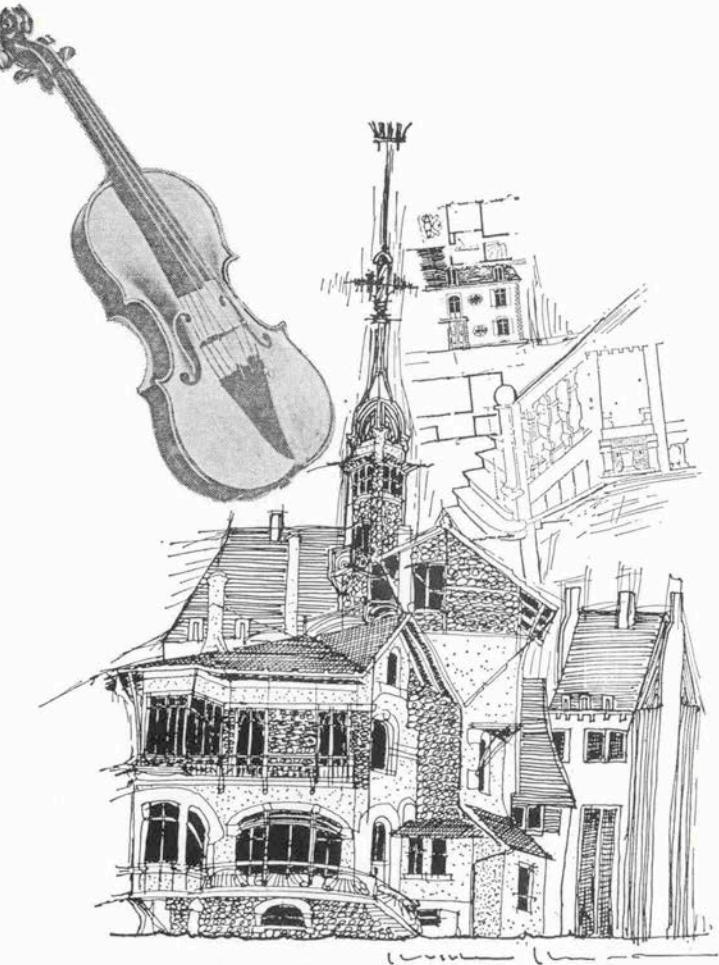
ぼくがその女体の細部に目をとられ、激しい音楽に気をとられていると、舞踏はその音階をのぼりつめ、女は飛び発つ火喰い鳥の表情のまま突然消えた。光の消えた舞台の間に残像が生きている。それは、きわめて重層的に繰り返される旋律が、その技巧的な展開にしだいに行き詰まり、もはや延命しようのない形式と化してしまった胸苦しさを突然引き裂きながら立ち現わ

れるスペイン人の顔である。

次々にショーンは紹介される。紹介されても怪しげな光を放ち、光学的な虚像のように闇に消えてゆく。眩惑的な舞台を搔きまわして音楽が流れ、揺れながら、ぼくは次々に差し出される料理をたらいでゆく。レモンと卵のギリシャ風スープを皮切りに、パブリカの利いたシシカバブー、トマトに詰められた挽き肉料理、様々な魚のフライ、ビフテキの後では山のように盛られたサラダ。だが飢餓感は消えることがない。ぼくの消化器管においては、食べる速度に消化する速度が追いついていて、食物は口に入るや飲み込まれ、胃袋に達するやいなや激しく消化しつくされて、たちまち栄養となり、そのエネル

ギーがすぐさま消化器管を活動せしめるのである。そのように、ぼくは長い時間をかけて大量の食事をする。

長い食事はぼくだけではない。ここでは誰もがゲップとアケビを交互に繰り返しながらブツブツと語り続け、たまに黙りこくると激しい咀嚼音を響かせてくる。ぼくの席から見渡すと、何重にも重なって見えるテーブルの上にはローソクが一つずつ置かれ、それに照らしだされる人々の顔は生首のように闇に浮かび、激しく頸を動かせて、コクリ、コクリと頷きあい、油ぎった料理に負けない程に額を光らせる。それら基本的な人間の動作というものは、静かに観察すればするほど不気味で単調なものだから、ぼくは大きな口を開いてパンにかぶりついた



少女の体のなかで、一片のパンが、いかにその形状を変化させ、肉体と関係し、排泄されるのかを想像してみたりする。テープル越しに見える舞台の上では、数人の楽団が立ち並び、体を左右にゆすりながら、ローソクの海へ向けて、軽やかなメロディーを流し続ける。しかし、よく見ると、彼らも時々樂器を口から離してアクビする。あやうく眠り込みそうになつたぼくに必要なのは一つのベッドだ。ぼくは必死で外に出て、ホテルを捜さねばならない。それだけの決意を実行するにも随分と骨が折れた。なによりも嫌なことは、あの巨大なリュックサックを再び背負わなければならないことだった。

ランプラス通りへ出ると、街灯は並木に挿まれて、緑色の光を放ち、光の届かない小枝の葉の上ではインジゴ色の星空が冷たそうだ。星空を追い掛けた路地に入ると、屋根の連なりが、鶴の歯の形で、くつきり黒く、星空を囁んでいる。囁み碎かれた空の破片が零れ落ちて無数の窓ガラスに嵌まっている。その下では薄汚れた壁々が、薄闇を吸い込もうとしている。薄闇は壁の間に忍び込み、影という影を縋り抱き起こし、透明な空気の中に連れ出そうとしている。闇の中では石までが、透明で流れやすい冷気に支配され、輪郭を風に溶かし、その重量を、暗い地底に音もなく落下させていた。かすかに、その上を男の影が横切つてゆく。やがて、男は分厚いゴチックの壁の中を通り抜けて消えてしまう。ぼくは目をこする。

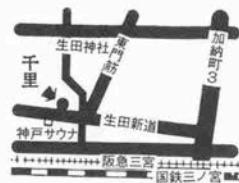
男たちを呑み込んだ建物は、その外壁を間に明け渡したまま、その内壁を家庭の形に輝かせ、闇の中に、いくつもの光の部屋を浮かび上がらせる。路地の奥では、壁の上にガス灯があり、終てのガス灯の下では背の高い娼婦が長い煙草に火をつける。壁灯の光では充分に証明しがたい彼女らの美貌を、ガスライターが下からも照らす。煙草の火が二つの間に泳ぎ、ぱんと落ちて火の粉が散る。

ぼくは落ちた煙草を踏みつけて、さらに路地の奥に入り、HOTELを捜す。今まで氣付かなかつたのだが、路地はわずかずつ曲がつてゆき、しかも少しずつ下り坂になっている。しまつた、と思う時にはもう遅すぎる。一度失われた方向感覚というものは永遠に取り戻すことができない。もうこれ以上迷わないためには、何でもいいからホテルを一軒探し出すことだ。だがどうだろう。ホテルが一軒だけ現われたら、すぐさまそこに入るのに、四つ角を曲がると、何件ものHOTELが輝いている。この事態は選ぶという厄介をぼくに押し付ける。ぼくはさらに迷い続けなければならない。

二番目のHOTELの下には、一人の男が立つていて、口から食べたばかりの食物を出しているところだ。それを二匹の犬が奪いあい、大きな犬が全部といらげたが、路上の雑炊には多量のアルコールが含まれているらしく、腰をふらつがせながら十メートル程歩いたが、すぐによぶつ倒れて、再び路上に食物を戻す。さらにその奥の方では娼婦たちが夜光性化粧品を塗りたくり、熱帯魚のように泳ぎながらホテルの入口を出たり入ったりする。

それら様々な現象により、ホテルは成立している。それらの現象のないところでは、またホテルもないのだ。はつきりしていることは、ぼく自身もそれらの現象に含まれつづつある一つの現象にすぎないということだ。ぼくには、一つのホテルを採用する理由もなければ、それを拒絶する理由もない。ぼくがあるホテルの入口に入ると、いうことは、それら様々な現象の中に自分が含みこまれてゆくということ以上の何の意味もない。ぼくはホテルに入る前にホテルを選ぶではなく、ホテルに入つてしまつてから、ホテルを選んだと思いつむのだ。(つづく)

今宵もまた  
明るくモダンな CHISATO で



千 STAND  
CHISATO 里

阪本 千里

神戸市生田区下山手通2丁目7-1 KSMビル1F  
TEL(078) 331-4730  
5:00PM~0:00AM 日曜・祭日休

潜り戸を通って  
“花”のおふくろさんの味を



●こん立て●  
とろろ飯定食  
お好み定食  
天プラ定食  
おつくり定食  
たかのり弁当  
花そうめん  
寄せ鍋  
茶碗蒸し  
湯豆腐

和風季節料理

花

11:30A.M~8:00P.M 月曜日定休  
さんプラザ地階 ☎331-0087

# 影と棲む

田口佳子

絵／田中徳喜



バスを降りて歩きはじめてから、サングラスをかけた。眩しく白い陽を反して、いた初夏の町並みが鯛色に沈んだ。色彩とは不思議なものだ。

陽の下で、家も木も石も電柱も、サングラスのレンズを通すとぴたつと呼吸を停止したようになって何やら秘密めいた色を帯びてくる。見慣れ住み慣れた町が、不自然な色の底で全然違った場所のように見えると、そこを歩く自分は直射日光の下では変化はないのに、別個の自分が歩くような気がした。

近づいて来た初老の主婦が、母の知り合いの人物だとわかつて、会釈しようとするより早く、その人はついと通り過ぎてしまった。

気がつかなかつたらしいとわかると、苑子は安堵と滑稽さを感じた。人間の視覚なんていい加減なものだと思つた。

熱気さえも封じられたような、鯛色の中で家が近くなってきた。

古いブロックの塀に、大きな柿の木の枝がしなだれかかるようにしている。若葉の色も、更に近寄つて見る門柱の表札の父の名も、

淡い褐色で古いネガを見るようだつた。手を差しこんで門を外し、門を開いて中に入る。靴を脱いでいると、庭に通じる木戸が鳴つて父が顔を覗かせた。

「よう、お前か、よく来たな」

父のくだけた表情につづいて、奥の座敷から出て来た母は翳つたままの色で、まあと小さくいって笑つ立つている。

三人は三様の、あるとまどいを見せてあわただしい感情のページをめくるように、すばやく視線を渡し合つた。

短い沈黙の中で、苑子は強い匂いを嗅いだ。幼い頃から彼女の体に沁みついた独特の香だつた。信心深い母が、年中祭壇に焚く線香の匂いは家全体に沁みついていて、いつか、家そのものが匂いを放つ感すらあつた。

湿っぽく執拗にまつわりつくのを、ふりきるようにして苑子は茶の間に通つた。

道を歩いている時、吹いてくる風にあんなに匂つたいつもより濃いめにつけた香水も影うすいほど、茶の間も抹香臭い。

理性も情感も絡めとるよう、唯、香が重く湿つて漂つた。

南に面しての庭は木が多く、夏はいろいろな虫がよく部屋にとびこんで来た。

背後が山になっているせいか、年中、青っぽく暗い家である。

「苑子、それ……外しなさい、家の中よ」

母が非難がましくいった。テーブルの前に坐った苑子はゆっくりとサングラスを外す。

植木の手入れでもしていたのか、泥のついた軍手を丸めもつた父が、湯殿へ行つて水の音をさせるのが聞こえ

る以外は森閑としている。お互の呼吸の音が聞こえる程だった。

「お父さんが弱つてるとひつてたけど、案外、元気そうじゃないの」

「もう年ですからね、年中どちらも体のあちこちがどうのこうのといつてるけど、まあ別にどうつてこともないわ。苑子も元気そうね」

それだけ交して、母と娘は特別なつかしそうでもなく、他人行儀というのもなく向き合っていた。一年ぶりで、しかも、苑子の離婚という問題を挟んで会ったにしては、生の感情がどこからか洩れてしまつたような乾いた雰囲

気だった。前のままだ、と苑子は思う。何かを抑えつけて二人は、目を逸らし合いながら見えぬ系の両端を握つていた。

「少し持つて行きたいものがあつて取りに来たのよ」

苑子は目を逸らしたままでいった。

「そのうちに帰つてくるだろ」とわかつていましたよ、あんたのものは全部そのままにしてあるから……」

母は膝に置いた手をみつめていう。

父が湯殿から出て來た。うれしそうな顔をしている。



TOKU.T

苑子が持参した菓子箱が開かれ、お茶が淹れられた。

彼女は、自分の前に置かれた湯呑みが茶托つきの来客用のものだと気がついた。

母は父と自分で用に、出石焼の揃いの品を使つた。白地に秋草を刻みこんだその夫婦湯呑みは、苑子にも見覚えがあった。母が友人たちと山陰へ旅行をした時に買って来たものだつた。苑子用のが別に一つあつた筈だが、割れてしまつたのだろうか。

母には昔から多分に見栄つぱりなどころがあつて、夫婦や親子といった肉親の絆をことさら円満に堅固なもののように折にふれ他人に誇示したがるところがあつた。

それは裏を返せば、繼母に育てられて温かな情愛を知らぬまま大きくなると、追いやるようにな中奉公に出された充たされぬ自分的心への穴埋めであり、現実への演出に過ぎなかつた。

苑子は父が、自分の家の使用人である女を、その美貌に惹かれて周囲の反対を押しきつて妻にしたという話を親戚の者から聞かされて知つてゐる。不幸な生い立ちを、どう同情的にさし引きしても、彼女は母の自己中心的な人間性を好きになれなかつた。結局、母は夫を眞実愛してもいいなし、その間に生まれた父親にべったりの苑子をも愛していなかつた。常に愛するのは自分だけに思えた。

旅先の土産物店で、解放感に唆かされた母が、多分既に寡婦になつた人も混るであろう友人たちに冷やかされながら、さも幸せそうに選んだに違ひない湯呑みが、まだ割れもせずに湯気を立てているのを苑子はほろ苦い微笑でみつめていた。

濃い煎茶が好きな父のは、飲み口に当たる秋草模様の所が、渋い褐色になつておらず、母のはうつすらとモスグリーンに色づいていた。使いこむほどに茶渋が、微妙な色づけをする清楚な白い陶器は、大ぶりと小ぶりに分けられてその色も濃淡に、自然に染め分けられたところが妙に男と女を思わせてなまなましかつた。

苑子は、昌男との二年の結婚生活で揃いの食器など使つたことがない。使えなかつたのである。昌男は母親と夫婦茶碗を使つていた。「色柄の好みがぴたり合いますのよ。だから、ついこんな風になつてしまひますの」

初めてそれを見て、何となくぎょとした苑子に、年令より若く見える姑はなまめかしい笑い方をした。気がつくと、揃いの品物は、茶碗だけではなかつた。浴衣も、浴用タオルも暮らしの中で、母と息子は好みを共有し合つともないわ、趣味がわるいわ。私と結婚した以上、もうやめて貰いたいの」

苑子がいうと、そんなことまで嫉くのかと、昌男は呆れた風に顔を見るばかりだつた。

母のように、とっくに心の離れた者同士が、その場の気分のままに求めた品を、何の意味づけもなく無造作に使うのはまだしも愛嬌があつた。多分、その時の彼女は、使う品が揃いのものであることをすら忘れていた筈だつた。

「その後、何も連絡はないの？」

湯呑みを口に運びかけた母が、湯気の中から目を向けていた。

昌男との生活の一端を、茶碗を見て思い出していた苑子はびっくりとする。

彼女は母の眼が嫌いだつた。

若い日の美しさを立証する部分は、まだ豊かな髪の生え際のよさや、しみ一つない皺の少ない肌にもうかがえるが、切れの大きな張りのあるよく光る瞳に集約されていた。

その眼は、彼女の性格的なものを一番よく現わしていた。知的な聰明さとは違つた、動物的な感覚の鋭さがあり、それが彼女のもつ予言好きで巫女的な霧開氣を一層強めていた。母は昔から勘の鋭さを誇っていた。

理論や判断、思考力の積み重ねになる結果よりも、自分の予知能力、直感の方が正しいと固く信じこんでいた。苑子の記憶にある若い日の両親の姿は、父の知性と母の直感とのそれからくる争いが多かつたようだ。

体の弱かつた苑子をめぐって、友人に医師の多い父の考えと、信仰深い母とはお互のいい分を守つて対立した。

自信たっぷりに苑子を引き受けた医師の手から、ひとつくるようにしてはかばしくない彼女を取り戻した母が信じる予言者の言葉に従つて民間療法で、こじれた肋膜炎を全快させた時のことは苑子自身もよく覚えていた。

生まれ育ち、知識教養の面で、夫やその一族に頭の上がらなかつた母が、事あるごとに勝星を挙げたのは彼女の直感から成る打つ手の早さに負うところも多かつた。

母にみつめられると嘘はつけず、こちらの考えが暗黙のうちに特殊な電波で吸い取られて行くような気がするのだ。

「何もないわ、あの人とはあれつきりよ」

「本当に？ こっそり二人で会ったりしてはいないでしょうね？」

「……」

答えるのもばからしくて、苑子は自分から視線を余裕をもって外した。母は追い打ちをかけてくる。いつもの口調で……。

「焼けばつくりに火つてこと知つているでしよう？ せいぜい注意することね」

「……」

「どうもあんたを見ると、そういう感じがするものだから」

また始まったと苑子が思うと同時に、思いを同じくしたらしい父の、千切りするような吐息が聞こえた。

そういう感じがするというのは母の口癖だった。冷たい色のついた風がすっとよぎるようになつの考え方、想いみたいなものが頭を突き抜けるのだそうである。

「もういいじゃないか。苑子だって十九や二十才の娘じやないんだ。それに、ああいう別れだつたんだがらな、本人がその辺のことは一番こたえてる筈だよ」

「ああいう別れだつたからいうんです。苑子、よく気をつけなさいよ、ぶざまなことだけはしないで頃だい」

母は自信ありげに眉を寄せてくり返す。



苑子はまた、びくんとする。ああいう別れという意味が、父と母とで食い違つてゐるような気がしたからだつた。父は苑子のいい分を信じて、姑との不仲が最大の原因だつたと思っている。優柔不斷なひとり息子の昌男の、

マザーコンプレックスに業を煮やして別れたのだと信じてゐる。だが、母もそうだとはいいきれなかつた。

昌男との仲がこじれだしても、苑子は母には相談しなかつた。結婚する時も、世間一般の母娘のように、希望やよろこびや、さまざまの臆測や不安感や、感傷で一層強く絆り合わされた紺に甘く息苦しい時を過ごす、といった風なことはなかつた。

小さい頃から母の直感力の影響で、その行動すら時には束縛されて育つた彼女は、結婚への夢を素直に羽ばたかせることができなかつた。母は何か、事あるごとに物心ついた苑子に対して、あんたは家庭に收まりきらない性分だといつづけて来た。彼女にいわせると、例によつて『そういう感じがするから』なのだろうが、小さな、ちょっととした行儀のわるさや、人との接し方の要領のわるさ、不器用さをも具体例のように取り上げていわれる。少女の苑子は少なからず傷ついた。

子ども心にも母の美しさは十分認められたらし、内心誇りとするところでもあつた。その美しい母から、新しい衣服を着せられても、何だかがつかりしたような色だけ見せつけられると、ふくらんだ心もしほんだ。

苑子が昌男との結婚を決心した時も、二年足らずの月日の間の姑との葛藤も、ます告げたのは父が最初だつた。離婚に踏み切つた時でさえも、母からは常に一步離れていた。だから、今更、とやこういわれることはないのだ。しばらく忘れていた不快さが彼女を襲つた。苑子は、照り翳りの激しい、母の鏡みたいな瞳をじっと見据えた。

△離婚の原因が昌男さんのお母さんだつたというのは嘘でしよう。

△では何だつたというの？

と、その眼はいっていた。逃げるのが口惜しくて、

△苑子が問ひ返す。

△昌男さんと巧く行かななかつたのでしょうか？夫婦としての結びめをきちんと作ることができなかつたからでしょうか？

眼はいいづづける。

△苑子、あなたは女として落第です。私がずっといつづけて来たように、あんたという娘は家庭に收まりきらぬ人なのです。

△いいえ、そんなことはないわ、子どもは流れただけれど妊娠した段階では少なくともお母さんより女としてまともだつた筈よ。私は昌男を愛してみごもつたけれど、結婚して一年も経たぬ間から別れたいと思つづけたといふあなたにとつて、私を宿したということはいったい何だつたの？確かな結びめだつたのでしょうか？

△苑子さえいなければ、とっくに別れていたとよく母はいつた。別れようと決意したとたんにみごもつたのだともいつた。

△苑子にはそれが、女の体のしくみの不合理を嘆くより、卑怯な逃げの口実にしか思えない。母がひそつと目を伏せた。現実の声で、ぼつりといつた。

△ご縁がなかつたんだわねえ。案外巧く行つてくれるかもしれないと思ったのに」嘘ばっかり。苑子は表情を崩さずに内心でうつすらと笑う。

△あなたの得意の直感とやらのレーダーに、赤信号が出ていたのではなかつたの？

△それをわざと知らん顔して、婚期を逸した私が、だんだん嵩高く世間体がわるいため、結婚の話を聞いてほつとしたふりをしてたんじやありませんか。それに、何もかも父親一辺倒の私が目ざわりで憎くもあつたしね▽

△あんただつて、内々焦つてたんじやないの？お父さん子つていわれて満足した時代が過ぎると女として迷つた筈よ